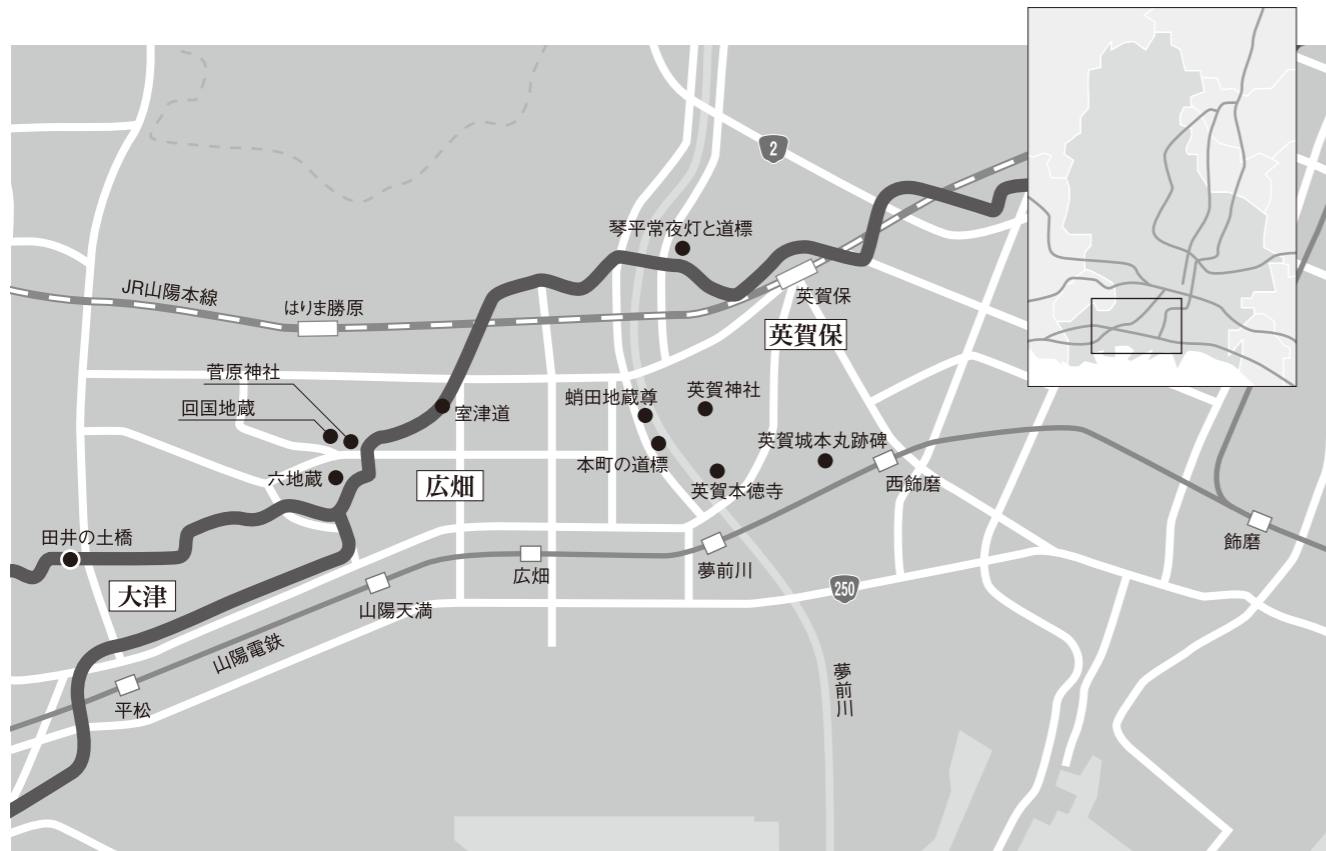


エリアで見る室津道①



広畑 [広畑地区・広畑第二地区]

室津道の痕跡をよく残す

夢前川の西側に広がる広畑は、畑が一带に広がっていたことから名付けられたといわれています。室津道は広畑地区では才や小坂を通っていました。小坂では現在も街道の町並みを見ることができます。街道沿いにある菅原神社は、菅原道真が大宰府に流された際に天候の悪化で英賀の田井ヶ浜に上陸したとき、自作の木像が高浜の浜辺「我久（高浜の浜辺の字名）」というところに流れついていたのを祭ったことが由緒といわれます。周辺には「左 網干港室津 右 あぼし駅」と刻まれた本町の道標や、漁師の網にかかったといわれる蛸田地蔵尊があります。



室津道



菅原神社



本町の道標



蛸田地蔵尊

英賀保 [英賀保地区]

城下町・門前町として栄えた

夢前川の東岸には、琴平常夜灯と道標があります。ここは町坪の藪山南から山崎山麓を経て夢前川へ至る道で、金毘羅参りをする庶民が頻繁に利用しました。ここから南へ進むと、英賀神社や英賀城跡(英賀本徳寺寺内町跡)があります。英賀城は嘉吉元年(1441年)、三木通近が入城して以来、三木氏10代にわたる140年間、播磨地方における経済・文化・宗教の中心地となり、寺内町を構成して栄華を極めました。歴代城主は英賀神社を領内の総氏神としてあがめるとともに、明応2年(1493年)には一族で浄土真宗に帰依。英賀本徳寺(英賀御坊)をはじめ多くの真宗寺院が建てられました。天正8年(1580年)の羽柴(豊臣)秀吉の攻略により、英賀城は落城。城下町も火の海に包まれたと伝えられています。その後、本徳寺は亀山に移されました。



琴平常夜灯と道標



英賀神社



英賀本徳寺(英賀御坊)跡



英賀城本丸跡碑

大津 [大津地区・大津茂地区]

北路と南路の分岐点

大津は、汐入川と大津茂川に挟まれた地域で、海を埋め立てて拓かれました。汐入川西岸の西土井では室津道が北路と南路に分岐しています。日本回国を記念して建立した回国地蔵には、「享保」の銘が刻まれています。汐入川公園の東側にも「享保14年(1729年)」と刻まれた六地藏があり、そばには姫路市保存樹エノキの老樹がそびえます。天満、長松では室津道の痕跡がよく残っています。大津中学校の東側にあった天保年間(1830年～1844年)に建てられた旧道標は移設保存され、平成6年に自治会により再建されました。大津茂川にかかる田井の土橋は、かつては欄干もなく華奢な橋げたに土を盛っただけの狭い橋だったと伝えられています。



回国地蔵



六地藏



田井の土橋跡

エリアで見る室津道②



余部 [余部地区]

御津への橋渡しの地

余部は姫路市とたつの市との境界にあり、揖保川の恵みに育まれた地域です。下余部と津市場出口の余子浜川にかかる小さな橋は「室津道の八枚橋」と呼ばれ、室津道の通過点だったと考えられています。かつては8枚の石がかかり、網干の余子浜から余部へ抜ける唯一の道でした。現在は市道となっています。少し西へ進むと、揖保川の河原に「室津道の八十の渡し」跡があります。現在は八十大橋が架かっていますが、当時はここから揖保川、中州、中川を経て御津町中島に渡ったとされています。

興浜同様に丸亀藩領となり、八木家が^{なまこ べい}大庄屋を任せられました。海鼠塀の長屋門が見事な建物が今に残ります。かつて東から北面の道路は水路で、裏門の北には船着き場があったといわれています。



室津道の八枚橋



室津道の八十の渡し



八木家住宅

網干 [網干地区・網干西地区]

歴史文化の香り豊かな町

網干の名は、魚吹八幡神社の放生会の日に漁師が殺生をやめ、網を干して参拝したことが由来といわれています。この魚吹八幡神社の門前の道が、室津道(北路)にあたります。神社の北側は農村として発展したため、畦が基盤の目のように地割りされた条里制の遺構が残っています。国重要文化財の釈迦三尊像と十六羅漢像を擁する大覚寺や、盤珪禅師とその弟子・田捨女にゆかりの龍門寺と不徹寺など数多くの文化財があります。

江戸時代初期の池田氏の後、網干は諸藩領に分割されます。興浜に丸亀藩の陣屋が置かれたのは、龍野藩主であった京極家が万治元年(1658年)に丸亀に移った後も京極家の領地として丸亀藩に属したからです。藩邸や倉庫はなくなりましたが、陣屋門が今に残されています。



魚吹八幡神社(津の宮)



龍門寺



不徹寺

STORY

龍門寺と不徹寺～盤珪禅師と田捨女～

^{ばんけいまいたく(はまか)}盤珪永琢は、元和8年(1622年)、播磨国揖西郡網干浜田村に生まれました。幼いころ、浜田から室津道で揖保川を渡り大覚寺内にあった寺子屋で学んだといわれます。厳しい修行を重ね、新しい禅の思想「不生禅」を提唱しました。江戸、四国、九州の各地を巡って47の寺を開き、亡くなった後も勧請開山(過去の高僧を開山として祭ること)となった寺が150におよぶほど尊敬されました。盤珪寺と呼ばれる寺の中でも、寛文元年(1661年)に浜田に建てられた龍門寺は、盤珪派の総本山ともいべきもので、播磨屈指の名利として知られます。

盤珪には弟子が多く、出家の弟子が400余、在家の弟子が五万人余といわれ、女性が多かったことも特徴です。尼弟子の中で最も知られるのは丹波市柏原出身の田捨女。捨女は6歳のときに「雪の朝 二の字二の字の

下駄の跡」という句を詠んだ俳人です。41歳で夫と死別すると浄土宗に入り、その後、盤珪の門に入って龍門寺の近くに不徹寺を開きました。